

末武コミュニティ拠点施設基本構想 【概要版】

現状と課題

1. 末武地区の人口

- ・14,772人(令和7年8月末)
- ・30歳～50歳の人口は20年前よりも約65%増加。
- ・居住歴の浅い市民の割合が高く、若い世代を中心とした人口増加の受け皿の中心地区。

2. ハザードマップ

- ・地区内に複数の河川(切戸川、平田川、末武川、玉鶴川等)が流れており、洪水ハザードマップでは区域内の大部分が浸水想定。

3. 末武公民館

- ・昭和48年築
- ・鉄筋コンクリート造2階建て
- ・敷地面積 約3,300㎡
- ・延床面積 890.02㎡
- ・建築後50年が経過。耐震性がなく、老朽化も著しく建替え。
- ・建設場所は「現地建替え」。



コンセプト

合言葉は「末コミで！」

～気軽に集える、頼れる拠点施設～

活気ある末武地域で、「出会い、交わり、関わり、繋がり、広がり」ができる空間を創出する。

※末コミ・・・末武コミュニティ拠点施設の略

施設整備基本方針

(1) おまかせパブリック・オリジナルパブリック

- ・使い方を指定しないオープンな施設、自由な施設。(誰でも、さまざまな利用を受け入れる。)
- ・地域住民が決める使い方。地域開放。地域住民が自由に利用できる(しやすい)スペース。
- ・末武地域の特色(若い世代)を生かした、子育て施設の充実。
「子どもを連れて末武公民館でちょっと遊ぶ」(対応する設備、スペース。)
- ・誰もが気軽に立ち寄って交流できる、地域の憩いの場となる施設。
「末武公民館でちょっと休憩する」(対応する設備、スペース。)
- ・新しい施設と地域との敷居を低く。シームレス化。
- ・動と静の空間
にぎやかな空間(交流ゾーン、講堂、講座室など)
静かな空間 (和室、図書コーナーなど)

(2) アカデミックエリアの創出

- ・近隣学校との連携、施設活用、アカデミックスペース、学習スペース

(3) 地域防災の拠点

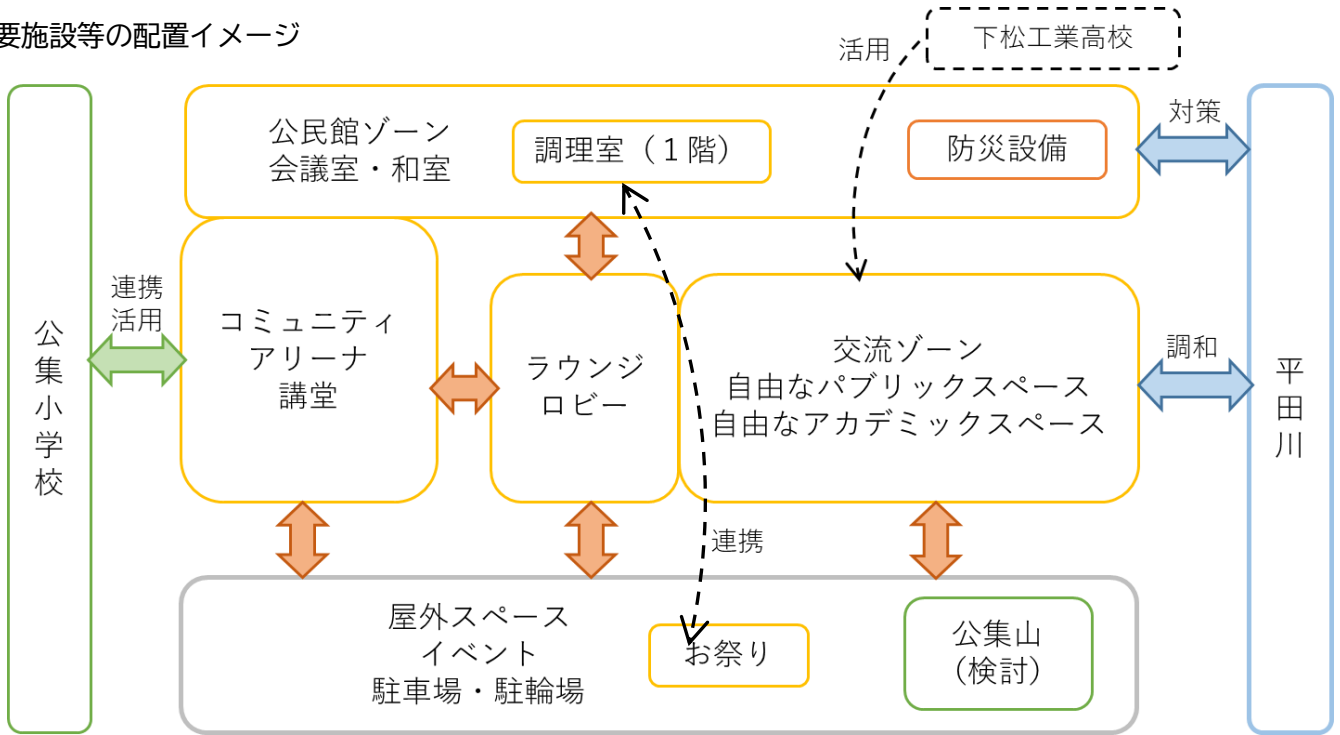
- ・末武地域の防災拠点として、災害時に地域住民が安心して避難できる施設。



必要施設と利用方法の想定

必要施設等	想定する利用方法
事務室	・貸館事務、更衣室、事務用倉庫、給湯室など ・明るく立ち寄りやすい、声を掛けやすい窓口
ラウンジ・ロビー	・明るく立ち寄りやすい開放感を持つ空間 ・地域住民が自由に利用できる(しやすい)オープンスペース(展示、地域情報発信、地域掲示板など)
自由なパブリックスペース アカデックススペース (交流ゾーン)	・ラウンジ、ロビーと連動。(アクセスしやすさ) ・くつろぎの場(誰でも利用可)、交流の場、お茶のみ場。 ・イベントの開催。(キッチンスタジオ、カフェ、セルフサーバー、展示など) ・児童、生徒、学生の利用の場。読書、図書閲覧の場。学習活用の場。 ・子どもの遊び場。(乳幼児専用スペース)
コミュニティアリーナ(講堂)	・運動スペースの確保。公集小学校屋内運動場との連携。イベント、発表会など。
会議室・大会議室	・各種会議、各種講座などの生涯学習の場。災害避難時は避難者居室。 ・会議規模による室の大きさの変更。(パーティションなど)
和室	・各種講座など生涯学習の場。災害避難時は要支援者居室。
調理室	・配食サービス(調理、配膳作業)。料理教室、キッチンスタジオ。(イベントなど) ・災害避難時は、炊き出し実施
トイレ・授乳室	・バリアフリーに対応。多目的トイレ(おむつ替え台、オストメイトなど)・授乳室。
避難所・防災施設	・地震、洪水、高潮、台風等災害時の避難場所、シャワー室。 ・防災倉庫(防災備品、備蓄食料品の保管)、屋上避難も検討。
エレベーター	・バリアフリーに対応
駐車場・駐輪場	・敷地を最大限活用した駐車スペースの確保。(障害者用含む。)
外構	・公集小学校、公集児童の家との連携。出入口の充実。(新しい施設に立寄りやすい工夫) ・平田川公園との調和のとれた施設。公集山と新しい施設との共存の可能性を検討。
防災設備	・ソーラー照明、災害用トイレ、かまどベンチ、太陽光発電、非常用発電機、蓄電池など。 ・クーリングシエルの機能整備。設備機器の水害対策。(高所設置)

必要施設等の配置イメージ



整備スケジュール(想定)

- ・令和7年度：基本構想策定、敷地水平測量、基本計画策定
- ・令和8年度：基本計画策定、基本設計、実施設計
- ・令和9年度：実施設計、解体工事
- 令和10年度：建築工事(1年目)
- 令和11年度：建築工事(2年目)